一級河川
五条川
総合治水対策特定河川事業

桶狭間の合戦時、織田信長の居城であった清洲城、豊臣秀吉の天下取りへと向かった清洲会議、徳川家康の名古屋城構築の命により清洲城と城下町が名古屋城周辺へ引っ越すこととなった清洲越まで、清洲城周辺は尾張の中心として大いに繁栄し、ほとりを流れる五条川は舟運、営農等の都市の発展を支えました。五条川は、周辺に歴史と文化が色づき、愛知県を代表する一級河川です。

愛知県

五条川流域の概要と計画について

五条川流域の概要

五条川は、ドラマ等の撮影で多く使われる県北部犬山市の明治村、1600 年代から利用され貯水量が全国 2 位の人工農業ため池である入鹿池を源とする新郷瀬川の左岸を上流端とし、犬山市、大口町、岩倉市、一宮市、北名古屋市、清須市、あま市を縦貫します。途中、一宮市等を流れる青木川等の支川を迎え、江戸時代に開削された日本一長い人工河川の新川へ合流する河川延長 28.2km、流域面積 114.8 ㎢の一級河川です。沿川には歴史的遺産や観光名所が数多く存在し、中上流部（大口町・江南市・岩倉市）は五条川沿いに桜並木が続き、岩倉市では桜祭りにあわせて鯉のぼりを川の中で洗う「のんぼり洗い」が行われます。中流部（清須市）は桶狭間の合戦時、織田信長の居城であった清洲城を中心に「ふるさとの川モデル事業」として高水敷を散策できる整備がなされ、下流部（あま市・清須市）は今ある自然に大きなダメージを与えないよう配慮した整備を行っています。

五条川流域の関係市町

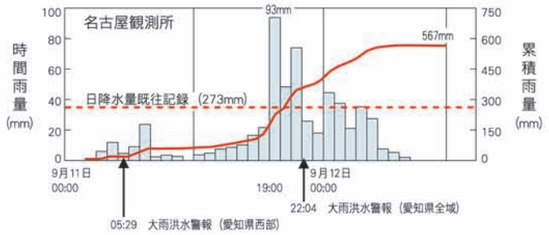
一宮市、犬山市、江南市、小牧市、稲沢市、岩倉市、清須市、北名古屋市、あま市、丹羽郡大口町、丹羽郡扶桑町

東海豪雨の被害

平成 12 年 9 月 11 日から 12 日にかけて東海地方を襲った記録的豪雨は、名古屋観測所（名古屋地方気象台）で 11 日 19 時に時間最大雨量 93mm、11 日未明から 12 日までの総雨量は 567mm と年間総雨量 1,535mm の 1/3 に及ぶこととなり、五条川が合流する新川の清須市内では左岸で 100m 程度破堤したことを始め、五条川でも堤防から洪水があふれるなど、床上・床下浸水被害が広がり、鉄道・道路・電気・水道などのライフラインに甚大な被害を受けました。この被害をきっかけに新川の河川激甚災害対策特別緊急事業が平成 12 年度～平成 16 年度に進められ、著しく治水安全度が向上したことから新川の支川である五条川の河川整備の促進が可能となりました。

■東海豪雨の被害状況

	浸水面積	床上浸水	床下浸水
東海豪雨で発生した被害	7,977ha	14,524 戸	9,863 戸
五条川流域で発生した被害	966ha	267 戸	996 戸



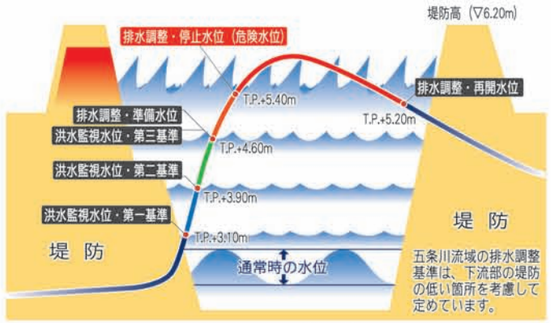
排水調整の実施

平成 12 年 9 月の東海豪雨災害をきっかけに、五条川の水位が高く危険となった場合に流域の皆さんを洪水被害から守ることを目的として、農地ポンプを含めた市街地等の排水ポンプ施設の操作について、平成 13 年 6 月に新川流域総合治水対策協議会において、「新川流域排水調整要綱」を制定し、運用しています。

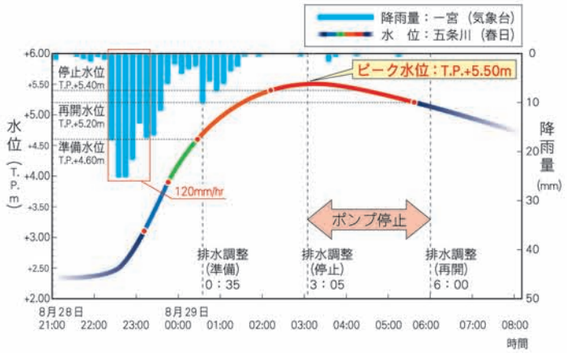
排水調整の運用開始後、平成 20 年 8 月の豪雨で発生した洪水時に愛知県で初めてのポンプ停止が五条川流域で適用されました。

○日時・時間
排水調整実施日：平成 20 年 8 月 29 日（金）
排水調整準備水位通知：0 時 35 分
排水調整停止水位通知：3 時 05 分
排水調整再開水位通知：6 時 00 分

ポンプ停止となった当時の降雨は、平成 20 年 8 月 28 日 21 時過ぎの降り始めから 29 日朝 8 時までの 24 時間に一宮観測所（名古屋地方気象台）で 218 ミリとなり、最大 1 時間雨量 120 ミリ（28 日 22 時 20 分～ 23 時 10 分）は、一宮観測所の観測史上第 1 位を記録しました。排水調整を実施した時間帯（29 日 3 時 05 分～ 6 時 00 分）は雨が弱くなってきたため、ポンプ停止に伴う大きな被害の発生には至りませんでした。

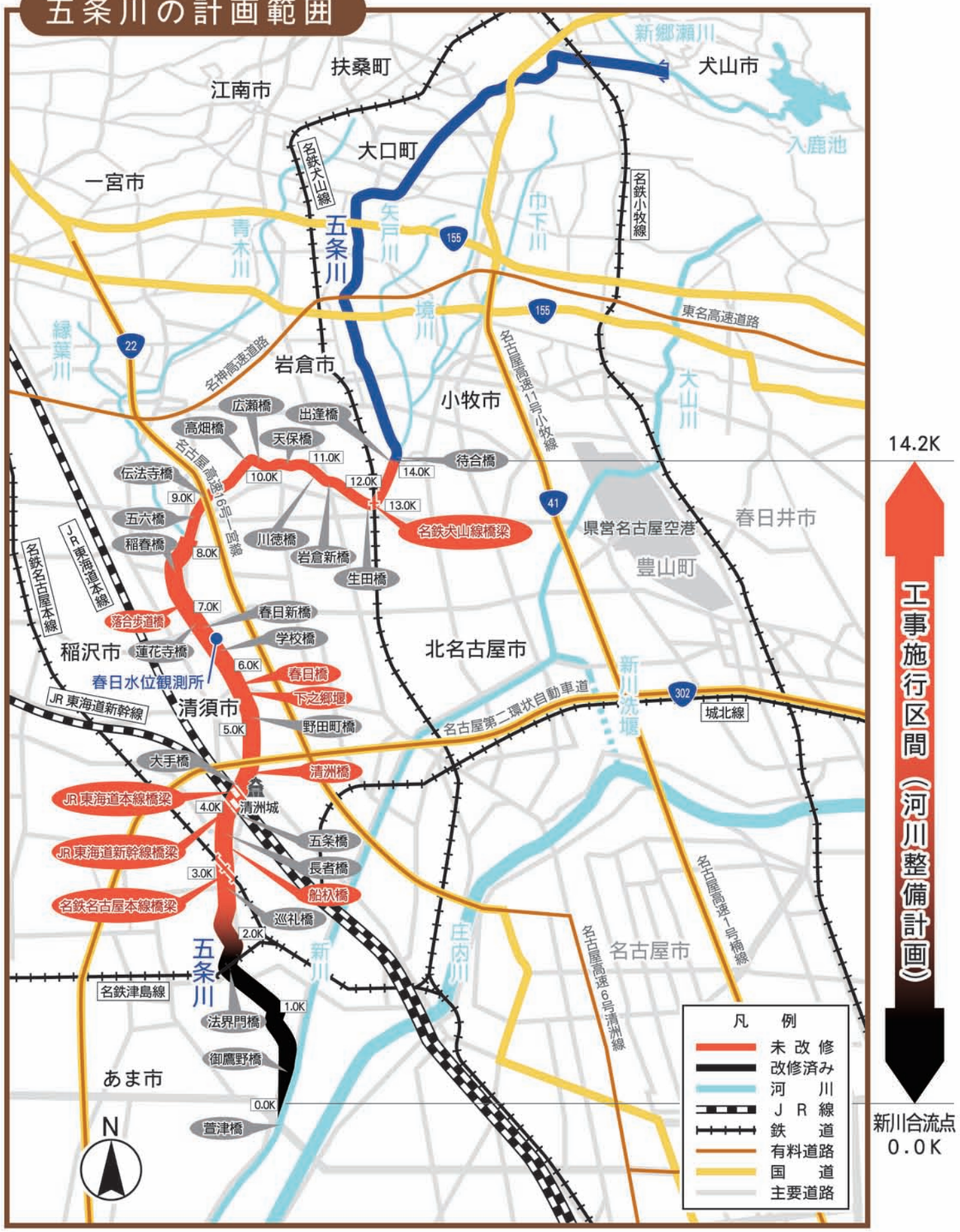


五条川　春日水位観測所



五条川水位（春日水位観測所）と降雨量（一宮観測所）

五条川の計画範囲



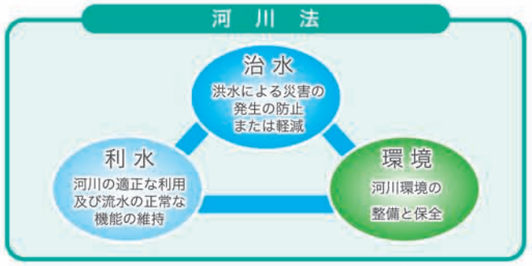
五条川の河川改修について

河川法と河川改修

現在の河川法（平成９年改正）では、法の目的にこれまでの「治水」「利水」に加えて、「環境（河川環境の整備と保全）」が位置付けられました。河川の改修にあたっては、治水能力の向上に加えて可能な限り自然の特性やメカニズムを活用する「多自然川づくり」が求められています。

五条川を含む新川流域は、都市化の進展が著しく、河川改修及び都市の雨水排除に加え、流域における保水・遊水機能の維持、浸水被害を抑える土地利用方法、洪水ハザードマップの作成など、河川と流域の両面から水害の軽減と防止を図る対策を行っていきます。

五条川の河川改修は、河川法に基づき平成 19 年 10 月に策定した新川圏域河川整備計画により、新川合流点から青木川合流点までは 30 年に１回程度発生する降雨を安全に流すことのできる河道を、青木川合流点より上流は 10 年に１回程度発生する降雨を安全に流すことができる河道を今後概ね 30 年間に整備していきます。また、特定都市河川浸水被害対策法に基づく「特定都市河川」及び「特定都市河川流域」の指定を平成 18 年１月から適用し、ある一定規模の開発を行う場合は、雨水貯留浸透施設の設置を必要としています。

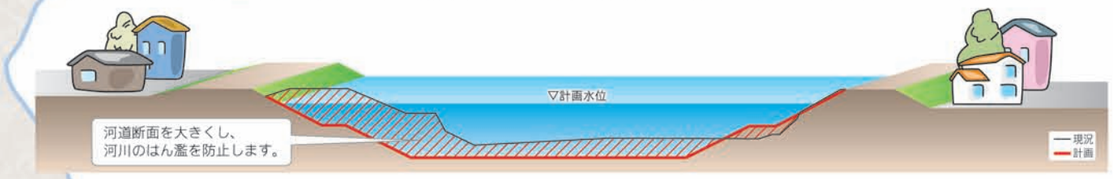


河川改修工事の概要

■河川改修工事の内容

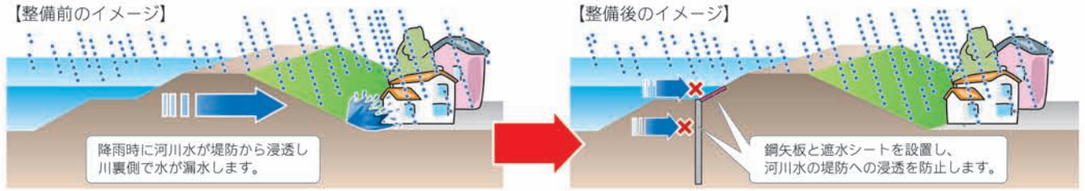
・流下能力の向上

川底を掘下げ、河岸を拡げることで、河道断面（水の流れる面積）を大きくし、河川のはん濫を防止します。



・浸透対策

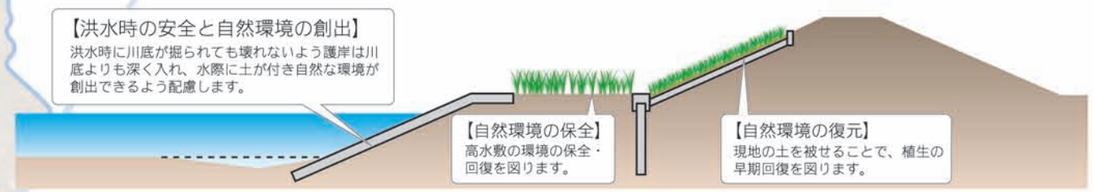
河川水が堤防から住宅地側へ浸透し、漏水することを防止するため、浸透が懸念される区間では川側に鋼矢板、遮水シートを設置します。



多自然川づくり

土で出来た堤防が洪水で壊れないよう川側に護岸ブロックを設置します。護岸ブロックは、川底よりも深く入れることで、仮に洪水時に川底が掘られても堤防が壊れないようにし、表面には現地の土を被せることで、植生の早期回復を図ります。

護岸等の河川工事では、より自然に配慮した多自然川づくりを目的として、整備を進めていきます。



河川改修工事の主な状況

法界門堰撤去工事

護岸設置工事

工事後の自然環境復元

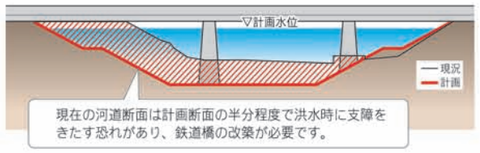
今後の課題

名鉄名古屋本線橋梁（2k975）の架け替え

五条川 3k000 付近にある名鉄名古屋本線は、古くから当時の五条川に合わせて建設された鉄道橋で、昭和 15 年から河川を占用し、現在に至っています。名鉄名古屋本線が架かる五条川の現通水断面は、計画する河川改修断面の半分程度と狭いため、上流から流れてくる洪水を下流に流せず、五条川の水が堤防から越水し、浸水被害を発生させる恐れがあります。平成 26 年度末現在、五条川の改修工事は、名鉄名古屋本線より少し下流にある 2k600 の巡礼橋辺りまで概ね進んでいるため、今後は鉄道橋をすみやかに改築する必要があります。また、河川を横断的に占用するこの鉄道橋の改築を行わないと、上流の河川改修を抜本的に進めることができません。

新清洲駅周辺の名鉄名古屋本線は、五条川に架かる鉄道橋の他に、国道 302 号線、県道名古屋祖父江線、都市計画道路西清洲上条線、市道、歩道が平面交差し、踏切が数多くあるため、慢性的な渋滞が発生しています。また、新清洲駅より北側の区画整理が進められていることもあり、今後は、名鉄名古屋本線の内、新清洲駅を含めた約 2.6km の区間を高架化することで、五条川の改修及び踏切の除却等を合わせて行う、鉄道高架化事業を関係者が一体となり進めて行きます。

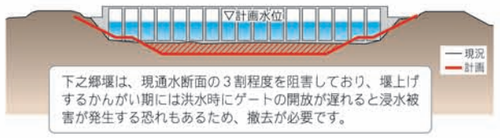
名鉄名古屋本線橋梁



下之郷堰（5k552）の撤去

五条川 5k600 付近にある下之郷堰は、例年６月中旬から９月下旬のかんがい期にかけて河川水位を T.P.+4.3m 程度までダムのように堰上げして取水し、水田へ配水しています。旧春日町役場近くにある五条川春日水位観測所の非かんがい期水位は平均的に T.P.+1.8m 程度ですが、水位は堰上げにより 2.5m 程度上昇し、その影響は支川の青木川まで及びます。堰上げする時期に大雨・洪水注意報が発表されると、堰を操作し水位を T.P.+3.5m まで下げ、全ゲートを開放しますが、何らかの事情で操作が遅れると、堰上流では洪水もしくは市街地及び農地からの排水ができず、浸水被害が発生する恐れがあります。平成 20 年８月の豪雨では、春日水位観測所で危険水位 T.P.+5.4m を越えたため、県内で初めて排水調整が適用され、関係市町では市街地等の排水ポンプは、午前３時５分から午前６時まで運転停止に陥りました。また、下之郷堰は堰上げしない状態でも川の中にある構造物が現通水断面の３割程度を阻害し、五条川の流下能力を下げています。下之郷堰の撤去に向けて、営農に利用する関係者と調整していきます。

下之郷堰



五条川周辺の歴史について

【名所・旧跡】

❶ 清 洲 城　信長、秀吉、天下取り始まりの城

戦国期には天下の名城と評され、21 歳で城主となった織田信長は尾張統一の拠点とし、永禄 3（1560）年、桶狭間の戦いに勝利し、天下統一の第一歩を踏み出したのがこの清洲城です。信長の死後、清洲会議の舞台となり、豊臣秀吉が出世の階段を駆け上がるきっかけとなりました。現在の清洲城天守閣は、旧清洲町の町制 100 周年を記念して平成元年に清洲文化広場に再建され、周辺には朱塗りの大手橋、清洲古城跡公園、清洲公園などと併せて楽しむことができます。

❷ 清洲城の石垣　当時の姿を残す石垣

河川改修工事に伴う遺跡調査により清洲公園前の五条川右岸で発見され、清洲古城跡公園内に移築復元されています。天正 14（1586）年頃に織田信長の次男・信雄が築き、清洲城下町が名古屋城下に移転される「清洲越」が行われる直前の南側本丸石垣と考えられます。この石垣は、野面積み（のづらづみ）と呼ばれる積み上げ方法で、石の形に統一性がなく、敵に登られやすい欠点はありますが、頑丈で排水性に優れています。

❸ 清 洲 公 園　織田信長公像・濃姫像が寄り添う公園

清洲公園内にある織田信長公出陣の像は、永禄 3（1560）年、清洲城より出陣する際の弱冠 27 歳の信長が桶狭間を見据え、脇には平成 24 年に移設された濃姫像が寄り添っています。

❹ 清洲山王宮日吉神社　秀吉出生祈願の地

豊臣秀吉の生母（大政所）がこの神社で子授けを祈願し、秀吉が生まれたことから、幼名を日吉丸と名付けられたといい、身のこなしが日吉神社の神の使いである猿に似ていたと伝えられています。

❺ 萱 津 神 社　我が国唯一の「漬物の祖神」

萱津神社があるこの地は、昔、海辺で塩が取れ、肥えた土地から多くの野菜が採れていました。この塩と野菜は、萱津神社に奉納されていましたが、たくさんの奉納を捨てるのがもったいないとカメに入れておいたところ、自然発酵しておいしい漬物となったのが漬物の始まりです。萱津神社は漬物の神社として知られており、境内には漬物を納める「香物殿」があります。

❻ 甚目寺観音　祈祷により天智天皇快癒、勅願寺

江戸時代から尾張四観音寺の筆頭として尊崇を集め、法隆寺や四天王寺に次ぐ我が国有数の由緒ある古寺です。境内には、国指定の重要文化財（南大門、三重の塔、東門）や、県指定の文化財（仁王像、梵鐘、愛染明王）が数多くあります。

【トピックス】

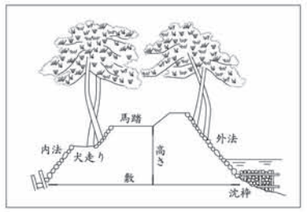
清洲会議とその後

本能寺の変で討たれた織田信長の“弔い合戦”に羽柴秀吉は、丹羽長秀、池田恒興、高山右近、黒田官兵衛等を率いて「山崎の戦い」で明智光秀を倒し、主君の仇討ちを果たします。天正 10（1582）年には、織田氏の継嗣問題及び領地再分配に関する「清洲会議」が羽柴秀吉、柴田勝家、丹羽長秀、池田恒興の四宿老により開かれ、秀吉が主張する「長子相続の筋目論」の三法師（信長の嫡男・信忠の嫡子）を長秀も支持し、信長の三男・信孝を擁立する勝家と対立したが、三法師が後継者に決まり、秀吉の勝利となります。領地の再配分が行われた後、秀吉と勝家の対立は強まっていき、天正 10（1582）年末に「賤ヶ岳の戦い」が始まり、破れた勝家は妻のお市の方と自害に追い込まれ、お市の娘、茶々、初、江の浅井三姉妹は秀吉が預かり、彼女たちの運命は大きく変わっていきます。その後、信長の次男・信雄と徳川家康の連合軍は「小牧・長久手の戦い」で秀吉と激突するものの、和議で終わり、豊臣政権へと繋がっていきます。

清洲会議一場面（絵本太閤記より）／日本城郭資料館所蔵

御囲堤（おかこいつつみ）と農業用水

尾張国は木曽川の大洪水で大きな被害を受けたことから、豊臣秀吉が木曽川堤防の原型を造ったといわれています。関ヶ原の合戦後、徳川家康の 9 男徳川義直（尾張藩初代藩主）が清洲城に入城すると、豊臣家の侵攻から西国に対する拠点である尾張藩を守るという軍事的目的により、慶長 13（1608）年、名古屋城への清洲越と併せて徳川家康の命により木曽川右岸堤より大きい左岸御囲堤が犬山から弥富に至る約 47km に築かれました。御囲堤が築かれると、木曽川から濃尾平野に流れていた支流を全て塞き止めることになり、支川を農業用水として活用できなくなったため、左岸堤に般若杁・大野杁等が尾張藩直営で造られ、宮田用水の原型となります。元々木曽川の氾濫原であった広大な濃尾平野は、川、用水、排水が複雑に入り交じった地形を成しており、平成 26 年 5 月に撤去を終えた法界門堰も用水の名残として利用されていたものです。御囲堤の多くの桜は、人々が桜を観賞することにより堤防が踏み固められると考え、明治 18（1885）年に当時の愛知県知事の提案で最初の桜が植樹されました。



日本のさくら名所 100 選とのんぼり洗い

五条川の中流域（岩倉市）は『日本のさくら名所 100 選』に選ばれ、川の両岸に植わる約 1,400 本 のソメイヨシノが水辺に桜のトンネルを形成し、毎年行われる桜祭りには多くの人が訪れています。また、400 年の伝統を誇るのぼり屋では、こいのぼりの糊（のり）を職人が五条川に入って落とす伝統的な手法「のんぼり洗い」が行われ、春の訪れを告げる風物詩として有名です。

清洲越（きよすごし）と五条橋

尾張の中心は長らく清洲城とその城下町でしたが、関ヶ原の合戦後、徳川家康の 9 男徳川義直（尾張藩初代藩主）が清洲城に入城すると、現在でいう名古屋台地の上に名古屋城を築造し、清洲から名古屋へ都市そのものを移転する清洲越として、家臣、町人のみならず、神社・仏閣、清洲城下の町屋のほとんどが慶長 15（1610）年より移され、清洲城小天守も名古屋に移りました。清洲城下の五条川に架けられていた橋は、名古屋城築城と同時期に開削された堀川にはじめて架けられた五条橋として移され、清洲越以来、五条橋付近の円頓寺界隈には多くの商人が移り住み、材木商、食料品問屋、舟運が集まり、盛り場としての性格を強くしていったと考えられます。

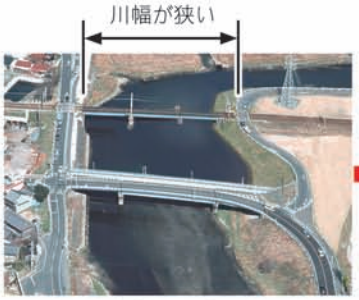
美濃路と清洲宿本陣跡

美濃路は熱田と中山道垂井宿間（約 57km）を結び、途中、渡船に頼らねばならない東海道より二里程遠回りになるものの、全行程が陸路であり天候に左右されることなく安全に通行が出来るため多くの旅人が利用しました。そのため幕府は美濃路を重要脇往還とし、道中奉行の管理下に置き宿場、一里塚などを整備し、参勤交代の西国大名を始め将軍上洛、朝鮮通信使、琉球王使など多くの貴人が通行しました。清洲宿本陣跡は、江戸時代、美濃路最大の本陣として、大名参勤、勅使や朝鮮・琉球使節などの宿泊や休憩所とされましたが、濃尾地震で焼失し、現在は正門のみが名残をとどめています。

これまでに五条川で実施した主な工事

名鉄津島線橋梁（1k630）の架け替え

旧名鉄津島線橋梁があった付近は、河川が大きく湾曲し、上下流に比べて川幅が半分程度と狭かったため、平成 12 年の東海豪雨では洪水の流れを阻害し、堤防から洪水が溢水するなど、浸水被害が発生した要因となりました。そのため、名鉄津島線の架け替え工事を平成 19 年 4 月から平成 25 年 5 月に実施し、現在では当時の 2 倍に相当する流量を安全に流すことができます。



名鉄津島線橋梁 架け替え前

名鉄津島線橋梁 架け替え後

法界門堰（1k357）の撤去

法界門堰は、河川水を堰上げし農業用水を取水するために川の中に大きな構造物としてあったため、平成 12 年の東海豪雨では洪水の流れを阻害し、堤防から水が溢れる等、浸水被害が発生した要因となりました。そのため、法界門堰を撤去する工事を平成 24 年 12 月から平成 26 年 5 月に実施しました。

法界門堰撤去前

法界門堰撤去後

水辺スポット整備事業

地域の皆さんが川にふれやすくするために、市町と連携して広場等の整備を進めてきました。

春日緑地（清須市）

水上デッキ（岩倉市）

ふるさとの川モデル事業

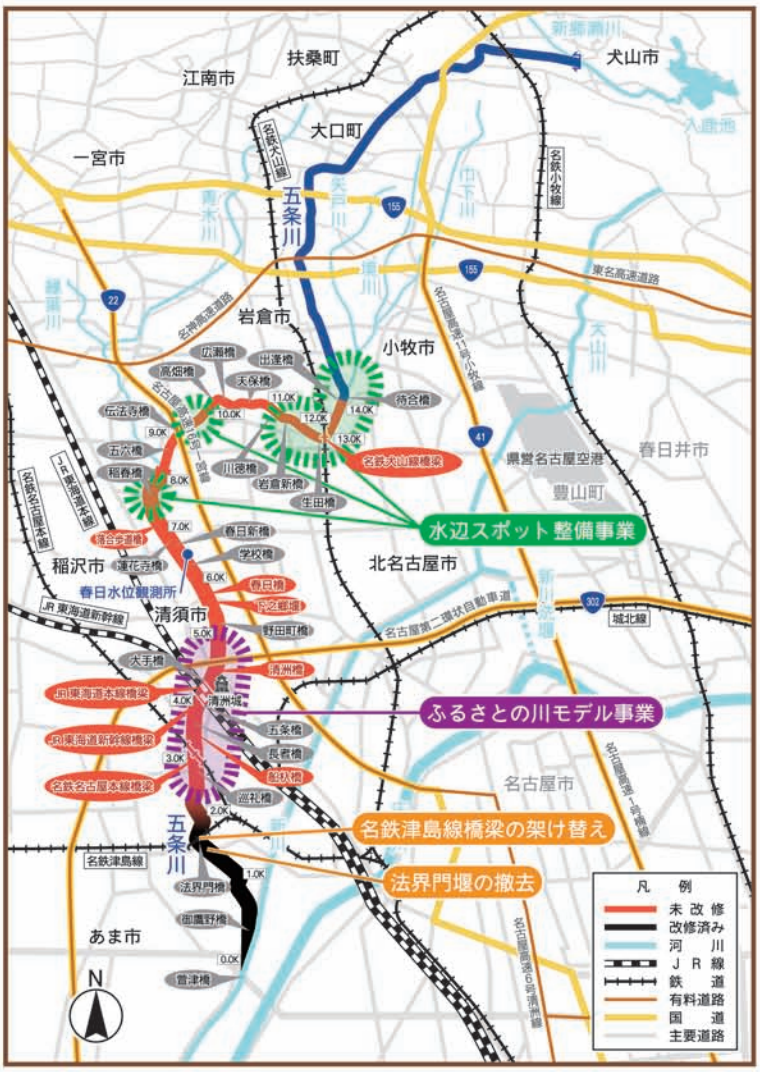
清洲城周辺の歴史・文化等に配慮し、清須市が整備する清洲公園等と一体となって散策路の整備を進めてきました。

長者町ゾーン

本丸ゾーン（清洲城石垣）

御園ゾーン（ふれあいの水辺）

散 策 路



尾張建設事務所 河川整備課
〒460-0001　名古屋市中区三の丸２丁目６番１号（三の丸庁舎５階）
TEL (052) 961-7211（代表）　FAX (052) 961-4582
http://www.pref.aichi.jp/kensetsu-somu/owari-kensetsu/

平成 27 年 3 月発行

このパンフレットは古紙を使用しています。